考えろよ。

回収屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

考えろよ。

【Ｎコード】

Ｎ２９７３Ｚ

【作者名】

回収屋

【あらすじ】

新薬開発のコンサルタントと軍用兵器の設計を専業とし、世界規模で展開する国営企業・『ＰＦＲＳ（パフリス）』。そこから逃亡した蒼神槐（あがみえんじゅ）は、ＰＦＲＳが隠蔽するバイオハザードを告訴しようと試みるが、ヒットマンの強襲により失敗。彼は最後の手段として、調査会社のエージェントを伴っての敵地潜入を画策するが、依頼を受けてやって来たのは何故か……明らかに挙動不審な二人組の少女だった。

『神の設計図（バイタルズ）』と呼称される遺物をめぐり繰り広げられる、政府と軍部とＰＦＲＳの三つ巴。その中で葛藤する青年・蒼神と、彼を

取り巻く不確定要素達の攻防……＋「ああ〜〜、やっぱ美青年の尻はええのう★」「ダメよッ、オマワリさんが見てる！」

ネットに消えた学説と護衛される青年（前書き）

世界中で大ヒットしたアニメ映画「攻殻機動隊」などの監督、押井守さんが現在のアニメ作品について「オタクの消費財と化し表現の体をなしていない」と批判した。

ネットではこの発言に納得する人もいるのだが、自分達の好きなアニメを批判していると感じたアニメファンは「押井こそオワコン」などと押井さんに対する盛大な批判を展開している。

■ほとんどのアニメはオタクの消費財と化した

朝日新聞は２０１１年１１月２１日付けの電子版コラム「アニマゲ丼」で、押井さんの東京芸術大学大学院映像研究科での講演（１１月１２日開催）を紹介した。講演で押井さんは

「僕の見る限り現在のアニメのほとんどはオタクの消費財と化し、コピーのコピーのコピーで『表現』の体をなしていない」

と語ったという。つまり、制作者には新たな創造性や、作品を通じて訴える思想的なものが欠如し、過去にヒットした作品の焼き直しばかり。例えば「萌え」が流行すればそうした作品ばかりになっている。また、今のアニメはオタクと呼ばれるファン層に媚びたものが多く、こうしたことから「表現」が制作者から無くなった、という批判だ。

確かに１１年９月から始まった２０本近い新作テレビアニメを見ると、さえない男性主人公の周りに美少女が群がる「ハーレムアニメ」が驚くほど多く、過去にヒットした「ハーレムアニメ」作品と共通する内容がかなり多い。

■宮崎駿監督も過去の作品のコピーに嘆いていた

実は、過去のヒット作品を真似たものが増えていることについては、以前から警鐘が鳴らされていた。宮崎駿監督はベルリン国際映画祭で「千と千尋の神隠し」が金熊賞（グランプリ）を獲得した０２年２月１９日、記者会見を開き、記者から日本アニメの世界的な地位を質問されると、「日本アニメはどん底の状態」とし

「庵野が自分たちはコピー世代の最初と言っていたが、それより若いのはコピーのコピーだ。そうしたことで（アニメ業界が）どれだけ歪んでいて薄くなっているか」

などと答えている。庵野というのは大ヒットアニメ映画「新世紀エヴァンゲリオン」の庵野秀明監督のことだ。

今回の押井さんの発言についてネットでは

「萌えクソアニメの乱発は誰が見ても異常」

「アニメ業界が飽和しすぎで、コピー品を粗製乱造しなきゃ回らなくなってる」

「売らなきゃ食っていけないからな。安定して売れるのがオタク向けの萌えやエロ」

などと納得する人もいるのだが、現在主流となっているアニメのファン達は、自分達の趣味趣向、好きなアニメを批判するのは許せない、と激しく反発。しかし理論で立ち向かえないからなのか

「押井のアニメくそつまんねーんだよ」

「押井も信者向けの消費財じゃん」

などといった作品批判や、人格批判へと発展し、大混乱となっている。

●この記事は、『小説家になろう』における作品の傾向にも該当します。“異世界”・“主人公最強”・“転生”・“ハーレム”・“チート”……オリジナルも二次創作もこの手のタグであふれかえっています。

アニメもラノベも観てもらってナンボ、読んでもらってナンボ。それは事実です。が、作品のファーストフード化に回収屋は食傷気味です。ちょっと考えてみましょう――アナタはより良い味を求めてハンバーガーや牛丼を食べに行きますか？　そう、まずあり得ません。ただ単純に安くて手っ取り早く、口当たりの良い刺激が欲しい場合の効率的な手段として選択されているのです。まさに『消費財』です。食べたその瞬間は確かにある一定の満足感が得られますが、店を出た直後には味の記憶など脳から消えます。作品も同様……どこかでよく目にするファクターに誘引され、その時は満足感が得られます。しかし、人から「で、どのシーンに一番感動した？」「ストーリーのあらすじを教えて」などと聞かれた際、どこまで答えられるでしょうか。正直、難しいでしょう。消費者は既に欲しかった刺激を消化し終え、また次の新しい安定した刺激を求めているのです。そこには作品を楽しんだという“記録”はあっても“記憶”はありません。

二次創作で一本完結させている回収屋が述べるのもなんですが、自分の作品構築のためにプラスとなるオリジナルに触れてみたい……常日頃から思っています。

二次創作にしか興味がない読者様をガッツリと矯正させる意味でも、今回の作品を披露していきたいです。

ネットに消えた学説と護衛される青年

『惑星自壊説』――今世紀初頭、ネットのとある科学サイトに発表された学説。仮説の域を出ない突拍子もない理論であったため、当時は一部のカルト的な支持者しかいなかった。３８億年前、地球上に１個の隕石が落下。隕石に含まれていたアミノ酸を素に、原始生命が発生する。あらゆる気象条件下で化学反応を展開し、次々と新しい生命が創り出されていった。彼等は最初、ごく単純な遺伝情報しか有しておらず、他の生命を食らって取り込むことにより、複雑なＤＮＡを構築し進化していった。地球という温床の中で、何億年もの間その行為は続き、新生しては滅びを繰り返す。それは自然の法則に完璧に則った現象であり、地球はただじっとその永久不滅のサイクルを見守っていた。そこで……地球は思った。

――――――――『死』とは何だ？――――――――

惑星は巨大な一個体の生命であり、いわゆる『意志』を持つとされる。が、その意志はあまりに不完全で、死に対する不安や恐れを理解できていなかった。地球は自らの破壊力を行使し、５度も大絶滅を繰り返したが、どの手段も決定的なダメージを与えるには至らず、地球の意志は不完全なままだった。しかし、彼には時間があった。あり過ぎた。だから永い時を経て考えた。

――――――――ダレかに殺してもらえばいい――――――――

最後にとられた手段こそが『人類』だった。現生人類は、およそ２０万年前に一つの独立した種として出現した。殆どの生命体が自然環境のサークルに解け合えるのに対して、人類だけが進化の過程

でサークルから外れていった。異常なスピードで脳髄を発達させ、爆発的に増殖し、生態系のピラミッドを決定づけ始めた。海洋を汚し、大気を濁らせ、大地を腐らせ、他種を滅ぼしだした。このことから引き出された一つの結論……

＜『人類』とは、地球が自らを滅ぼすために創り出した『生体兵器』である＞

この学説を発表した科学者は、マスコミの前には一度も姿を見せず、ネット上のみでのゲリラ的活動を繰り返し、ひたすらこの学説の危険性を主張していた。このままでは近い将来、確実に地球の自壊は成功してしまう。地球は人類を作為的に進化させて、より優れた遺伝情報の所有者を生成している。２０万年近くかけた計画が最終段階に入っている。名を明かさず、顔も見せず、ひたすらネットの中で声を上げるその科学者は、新興宗教の教祖の如き扱いを受けていた。この小さな騒動が、一般メディアにも取り上げられるようになった時分の１ヶ月ほど前……日ノ本の本土から遠く離れたとある海域にて、局所的な海底火山が発生。それにより生じた巨大な海底の亀裂から、正体不明の遺物が発見された。それは――『人型』。回収し検査した当時の国家調査室が出した回答……

＜全長１７０センチ・重量８０キロ。材質は不明。人間の造形に酷似しており、体表面は透明で、内部構造が肉眼で認知できる。骨格・筋肉・臓器・神経・血管……その全てが人型容器の正しい位置に形作られ、電子顕微鏡を使って初めて確認できるような、微細な組織まで設計された『完全な人体設計図』＞

最も奇異とすべきは、その人体設計図が出土した海底の地層の年代。測定した結果、その遺物は現生人類が生じるよりも以前のモノと断定された。この遺物は『神の設計図（バイタルズ）』と名づけられ、国家調査

室は情報規制法案を立ち上げてハッキング防止対策を施し、回収にあたったサルベージ班には情報機関の監視がつくほどだった。ネット上を騒がせた科学者が、この一件と何だかの関係があるのでは……そんな噂が囁かれだした。しかし、国家調査室のハッキング対策により、問題の科学者も息を潜めだし、次第にその存在はネット社会の記憶から消えていった。そして――

２０年が経過した。

一人の青年が刑務所の中にいた。数名の私服刑事が周囲をウロウロしているが、特に張り詰めた感じの空気でもない。３０坪程の広さがある一室で、その青年はソファに腰掛けて両手を組み、何かを心配するような面持ちでうつむいている。

「どうぞ楽にしてください。我々がついていますので」

刑事の中でも一際貫禄のある初老の男が声をかけてきた。そして、コーヒーの注がれた紙コップをその青年に差し出した。

「ええ……分かっています」

そう言って紙コップを受け取る青年の顔には、明らかに疲労の色が濃く出ていた。歳の頃は２０代前半くらいだろうか、まだ少々幼さが残るその顔からは、何かに怯えるような落ち着きの無さが見て取れる。

「あの……ちょっとトイレに」

「ええ、どうぞ」

この部屋に出入り口は一つ。コーヒーを差し出した初老の刑事が、出入り口の側に立っている若手の刑事に目配せする。ドコへ行くにも護衛がつく。刑務所の中なのだから当然の処置なのだろうが、見知らぬ複数の人間に、四六時中まとわりつかれるのはカナリのストレスになる。『インペリアム』と呼ばれるこの刑務所は、一般の犯罪者収容施設とは異なり、犯罪に巻き込まれてしまった被害者や、大物犯罪者を摘発するのに重要な役割を果たす証人を保護するため

の隠れ家。国家調査室の直轄で、軍施設並みにセキュリティレベルが高い。
「ボクの証言で本当に解決するんでしょうか……？」
部屋に戻った青年がボソッと呟いた。
「もちろんです。我々に全て御任せください」
何とも冷静に言ってくれるが、言うのは簡単。問題は結果だ。
「明日の段取りは？」
「法廷には朝9時到着予定ですので、7時半にはここを出ます。そろそろ休まれますか？」
「……そうさせてもらいます」
と言っても、寝室が別に用意されているワケではなく、ソファに横になるだけ。そんな生活が既に5日も続いている。
「それではまた明日」
初老の刑事は、出入り口にずっと立っていた若手の刑事に一通りの指示を出し、他の刑事達と共に部屋を後にした。
「……」
窓一つ無いこの収容施設に閉じこもっていると、昼と夜を区別する感覚が日増しにおかしくなってくる。テレビや新聞に目を通して一日の経過を知るが、外出できないままだと、まるで世界から追い出されたような違和感が生まれる。
「もう少しの辛抱ですよ、蒼神（あがみ）博士」
青年の心境を読み取ったのか、見張りとして残った若手刑事が、照明の一部を落としながら声をかけてきた。
「……宜しくお願いします」
『蒼神博士』と呼ばれた青年は、ペコリと小さく頭を下げ、毛布をかぶって横になった。
「……」
静かだ。あまりに静かだ。雑音が一つも聞こえないと、逆にその静寂が耳障りになるくらいだ。
（よそう……今更考えても遅い）

視界が暗くなる。目を閉じる。眠気が……

フォンフォンフォンフォン！！　フォンフォンフォンフォン！！

「――――――！？」

一匹目の羊が柵を越えようとした瞬間、けたたましい警報が鳴り響いた。見張りの刑事はホルスターに手をかけ、青年はソファから飛び起きた。

「な、何が……！？」

「……分かりません」

バタバタバタッ！

出入り口の向こう側から複数の足音が。刑事がホルスターから自動拳銃（オートマチック）を抜く。

「博士ッ！」

扉のコンソールが点滅してロックが解除され、さっき出て行ったばかりの刑事達が慌てて雪崩れ込んできた。

「主任、何事ですか！？」

「敷地内に不審者の侵入を確認した。相手は一人だけだ」

「敵襲ですか！？」

「分からんが……もしそうならとんだマヌケだ」

「刑事さん、ここにいて大丈夫なんですか？」

青年が怯えきった声で問いかける。

「大丈夫もなにも、インペリアムにおいてこの部屋が最もセキュリティに優れているんですよ。心配ありません」

そう言って他の刑事達に指示を出し、素早く配置につかせる。

「テレビをつけろ。監視カメラとチャンネルを合わせるんだ」

若手刑事がモニターを調整すると、監視カメラの映像が映し出される。正面玄関口、事務室、医務室、屋上、中庭……発見。

「何だありゃ？」

中庭をモニターしているカメラの映像に、不審人物が映っている。

ライトアップ用の照明が強すぎて顔はよく見えないが、どうやら女のようだ。体にピッタリと張り付くようなボディスーツを装着し、そのうえ裸足。不審尋問を受けても文句の言えないような格好だ。どうやって中庭まで侵入したかは不明だが、モニターの女は何かを探すかのようにキョロキョロしている。

「こちらセクション・C、モニター室応答しろ」

刑事主任が無線機で呼びかけた。

＜こちらモニター室。そっちは異常無いか？＞

「今の所はな」

＜機動部隊が全員配置についた。コスプレまがいのイカレ女の方は、まだこちらの動きに気付いていないようだがな＞

「結構。絶対に殺すなよ。貴重な情報源になるかもしれん」

主任が北叟笑む。その直後――

＜蒼神博士ぇぇぇぇぇぇぇ――――――――――――！！　ドコにいるのおぉぉぉぉぉぉ――――――――――――！？＞

豪胆なのかバカなのか、女はターゲットの名を大声で喚く有様だ。その声は監視カメラのスピーカーを通して、青年のいる部屋にもハッキリと聞こえてきた。

「そんな……何てことを！」

名を呼ばれた本人が、口を半開きにしてたじろいだ。

「知っている顔ですか、博士？」

「い、いえ……そんなハズは……」

ピピッ、ピピッ、ピピッ

刑事主任の無線機が鳴る。

「準備万端か？」

＜いつでもいける＞

主任は無線機を片手にモニターを凝視して……

「よし、制圧開始ッ！！」

ゴー・サインが出される。同時に警棒やライフル銃を持った機動隊員十数名が、建物の窓や物陰から躍り出て、侵入者の周囲を取り囲んだ。
＜そこを動くなッ！＞
＜早く腹這いになれッ！＞
＜武器は持っていないかッ！？＞
スピーカーから機動隊員の喧騒が聞こえてきて、目標の女不審者があっという間に制圧されたかのように思えた。
「……」
瞬きを忘れ、真剣な目でモニターの様子を見つめる蒼神博士が、ゴクリと息を呑む。
＜うわッ、びっくりしたぁぁぁぁぁ～～！　アンタ達ダレよッ！？＞
女不審者が自分の置かれている立場を無視し、無責任なセリフを叫ぶ。
＜そりゃこっちのセリフだ！　政府施設への不法侵入の現行犯で逮捕する！＞
機動隊員の怒号がとぶ。
＜蒼神博士ぇぇぇぇぇ～～！！　聞こえないのぉぉぉぉぉ～～！？＞
機動隊員の指示に一切従うことなく、またもや大声で青年の名前を呼ぶ始末だ。
「何だコイツは……？」
あまりのマヌケな状況に、モニターを見つめる刑事達も呆れ返っている。
＜いいかげんにしろッ！＞
業を煮やした隊員の一人が女を捻り伏せようと、その肩をつかもうとした瞬間……
ブワッ――――――！！
隊員のでかい図体が宙に浮いて、背中から勢い良く地面に落下す

る。
＜触んないでよ、バカ！！＞
隊員の胸ぐらを片手でつかんで無造作に投げたのだ。女性の腕力とはとても思えない。
「抵抗するなッ！」
警告すると同時に、警棒を構えた隊員二名が左右から挟みこむようにして襲いかかるが、女はその場から一歩も動かず、上半身を器用にひねって二本の警棒をかわすと、両の拳を裏拳気味に相手の顔面へと叩き込んだ。
「おいおいッ……！？」
拳を喰らった二名は鼻血を吹いて崩れ落ち、モニターで観戦する刑事達に不愉快な緊張感がはしる。
「大人しくしろッ！　いいか、これは最後通牒だッ！」
今にも発砲したくてウズウズしている銃口が女不審者に向けられ、スコープサイトのレーザーが目標の急所を集中的に這っている。
＜うるさいなあッ！　早く蒼神博士を殺して帰らないと怒られるのッ！　だからオジサン達邪魔しないで――＞

バンッッッ――――――――！！

発砲。
「……やったか？」
モニターを見つめる刑事主任が画面にグッと近づいて目をこらす。
「ん……？」
様子がおかしい。
「何だ？」
女の上半身が大きく後ろに仰け反って、曲がった釘のように固まっている。
「どうした？　命中したのか？」

刑事主任が無線で問う。
＜分からん……少し待ってくれ＞
ライフルをしっかりと構えた隊員数名が、合図を受けて駆け足で女に近づき、十分に警戒しつつ様子をうかがう。
「どうなんだ？」
＜あ～～……こりゃヒデぇ。貫通してないところを見ると、一応、防弾処理のされたボディスーツのようだが、胸元がえぐれちまってやがる＞
「死んでいるのか？」
＜この体勢で生きてたらコントだ＞
「よし、検死官に委ねて身元を調べろ。わずかでも法廷で使える情報があれば――」

――ヒュッ

＜ぅ……ッ……！＞
女の変死体が突如、上半身を３６０度ひねって元の体勢に戻った。と同時に、無線機から呻き声のようなものが聞こえ、取り囲んでいた隊員達がもがくように倒れ伏した。
「な、何事だッ！？」
動揺する刑事主任が見たのは、女の両手にしっかりと握られた『刃物』。刃渡り３０センチほどのシースナイフが二本……照明に照らし出されてギラギラと光っている。
「ひッ――！」
明確な殺傷能力を目にした蒼神博士が、顔を引きつらせた。
＜痛いなあッ！　危ないじゃんッ！＞
ライフル弾の直撃を受けて素直に感想を述べている時点で、尋常な相手ではない。

パンッ！　パンッ！　パンッ！

残る隊員達は指示を待つこともなく本能に従って拳銃で応戦する。
＜こんにゃろ！！＞
女の方はそれに応えるかのようにナイフを構え、機動隊めがけて跳びこんでいく。
「――なッ！？」
思いもよらない展開に、モニターを凝視する全員がマヌケ面で口を半開きにしている。
「主任……我々はどうします？」
「何もするな」
「……は？」
「篭城だ。ここでやり過ごす」
「し、しかし……」
スピーカーからは、あまり聞きたくない隊員達の断末魔が聞こえてくる。
「我々の仕事は、あくまで蒼神博士を無事に法廷へ送り届けること。避けられるリスクは極力避けろ」
モニターの隅の方で血飛沫が上がっている。銃声は鳴り響いているが、隊員達の叫び声は止まらない。
「応援は！？　ここは刑務所でしょ！？」
蒼神博士が必死の形相で最もな質問をする。
「残念ながら……このインペリアムは囚人を収容する一般のソレとは違い、最小限の刑務官で維持されています」
「つまり……外部からの応援が到着するまで、身動きできないということですか？」
「申し上げにくいのですが、その選択肢もありません」
「な、何故です？」
「重要な証人を確実に保護するためには、情報の漏洩を極力避けなければなりません。そのため、外部との連絡手段はモニター室の端末からしかできません」

「でしたらすぐ、モニター室の担当者に連絡をッ」
「担当者は……現在、モニターの中で死んでいます」
画面を指差され、絶望感が一挙に湧いてきた。
「そんな、バカな……！」
蒼神の顔色がみるみる青ざめて、イヤな汗が額をじっとりと濡らしている。
「この状況下で言うのもなんですが……どうか落ち着いてください。ここは絶対に安全です」
刑事主任は部下達の手前もあってか、冷静を装ってはいるが、篭城というのは想定外だった。が、彼は仕事の関係上、この部屋について熟知していた。
「この部屋の外壁には、原子力発電所で使用される防護壁と同じ物が用いられています。たとえ大型航空機が時速１００キロで突っ込んできても、防ぎきるだけの強度を誇ります。つまり、侵入者がライフル銃を奪って撃ち込んできたとしても、微動だにしません」
彼の講釈を聞いて部下の刑事達に安堵がもどる。
「それはそうと……博士、心当たりはないんですか？」
「あ、う……」
ターゲットの名前を力一杯叫んで登場するような危険人物……そんなヤツと知り合いとは言いたくないだろうが、状況からある程度の予想はついていた。
「どうなんです？」
「お、おそらく、アノの女性は……」

ガギャン――――――――――――ッッッ！！

「――――――ッ！？」
聞きたくもない剣呑な音がして、部屋の中の全員が一点を見つめた。つい先程説明のあった、特別な防護壁から何かが――“生えている”。そして……

ガリガリガリガリッッッ――――――――――――！！　ガリガリガリガリッッッ――――――――！！

「うおッ！？」

絶対安全なハズの防護壁に、ものすごい勢いで割れ目が入っていき、汚い四角形を形作っていく。コンクリートの破片のような細かい瓦礫を床にタップリと散らかし……

ドオォォォォォ――――ン！！　ドオォォォォォ――――ン！！

ドオォォォォォ――――ン！！

「うおおッ！？」

土木用重機が衝突してくるような轟音が響き渡り、部屋中がビリビリッと振動する。

「あ、ありえん……！　一体、何でできている……！？」

まさかの超力技。防護壁の性能を凌駕するナイフの切れ味と、女の膂力。目の前で起きている現実に対処すべく、刑事主任はホルスターから拳銃を抜く。他の刑事もそれにならって銃を構えたが、このまま女不審者が突入してくれれば、モニターの中の斬殺体に仲間入りすることは目に見えていた。

「博士、出入り口まで下がってください」

「え……？」

「見る限り、敵は単独犯です。別セクションに逃げ込めば、多少の時間稼ぎにはなるでしょう」

「で、でも……アナタ達は？」

「このような体たらくで申し訳ありません。我々はここに残って出来る限りの――」

「うっりゃあああああああああああ――――――――――――

ッッッ！！」
ドゴオオオオオオオオオオオ――――――――
ッッッン！！

とてつもなく力のこもった一声と同時に、防護壁の一部が積み木のように内側へ抜き出される。立ち上る粉塵……その中を人影が一瞬揺らめく。最早、主任の指示を仰ぐ必要はない。

パンパンパンッ！　パンパンパンッ！

９ミリ弾が粉塵めがけて次々と撃ち込まれ、弾が命中する度に人影がゴム人形のように弾む。
「博士ッ！　さあ、早くッ！」
扉のロックが外れる。
「ご、ごめんなさい……ボクは……」
「アレっ？　蒼神博士の声がした」
（――――――ッ！？）
少女のような幼さの感じる声がして、『敵』はその威容をさらけた。年の頃は２０代半ば程で、浅黒い肌をしており、染めてあるのか地毛なのかは不明な白髪のミディアムカット。
「あ、博士がいた。じゃあ、すぐに殺しちゃうね☆」
本人を前にして、屈託の無い笑顔でサラリと宣告する。彼女の表情には何の意図も感じられない。外部から受けた刺激に即反応する昆虫のようだ。
「フ、フリージア……どうして君が、こんな……？」
面と向かって“今から殺します”と宣言する女を前にし、彼の脚は笑っていた。
「畜生がッ！」
パンッ――――！
彼等と不審者との距離はわずか。刑事主任の撃った弾が外れるハ

ズもなく、『フリージア』と呼ばれた女の喉を貫通した。
「げほッ！　げほッ！」
首に紅く小さな華が咲き、女は激しく咳き込んで辺りに血をブチ撒ける。
「やった……」
首に銃弾の直撃を食らって倒れないのなら、相手は間違いなく人とはみなされない。そして、彼等警察にそんな“人外”の相手など務まりようもない。
「うえぇぇぇ～～、喉が痛あ～～い……けほッ（泣）」
まるで小児科の待合室で痛がる子供だ。もちろん、倒れる様子はない。要するに“人外”決定だ。
「くっそおおおおおおおおおおおおおッ！！」
主任、激昂。

ヒュッ――　ヒュッ――　ヒュッ――
光刃。

「パパがね、博士を殺せって☆」
ドサッドサッ、ドサッ……
総殺。
「そ、そんな……『支配人（オーナー）』がボクを？」
「うん、殺してきなさいって。でもね博士……“殺す”ってどうすればいいの？」
幾つもの斬殺体を積み上げておきながら、根本的な質問をされた。博士の表情が恐怖とはまた別の感情で曇る。それは相手に対する哀れみのようにも見てとれた。
「フリージア……君の足元に倒れ、血を流して動かなくなった人達がいるだろ？」
「うん、いるよ」
「これが人を“殺す”ということなんだ」

彼はとっても大切な事を教えていた。女は自分の足元に転がる刑事の死骸を、足のつま先で突っつく。もちろん、反応は無い。初めて目にする生き物を観察するような女の目つき……その瞳は瞬く間に潤む。
「は、博士ぇ、博士ぇ……動かないよぉ！　何にも言わないよぉ！」
女が泣き始める。刑事達の死を完全に無駄にする涙がボロボロ流れ出る。
「そう、これが“死”だ。フリージア……君がしたことだ」
彼は泣き出す女に対して、とどめをさすかのように毅然と言い放った。
「うっ……うっ……うわあああああああああああああああん！！」
号泣。
「博士が死ぬのやだあああ〜〜ッ！　殺すのやだあああ〜〜ッ！」
とうとうその場にしゃがみこんで泣きじゃくる始末だ。
「フリージア、こっちを見て」
そう言って博士はその場にゆっくりと体を沈め、何の脈絡もなく倒れこんで動かなくなった。
「……博士？」
唐突な出来事に泣くのをやめた女は、鼻水をすすりながら彼に呼びかけた。
「……」
が、応答は無い。
「し、死んじゃった……博士が死んじゃった……！」
女の顔色がみるみる青ざめる。冷静に状況を把握できていない彼女にとって、目の前で起きた現象は、あまりに残酷な仕打ちにも見て取れた。
「……」
本物の死体に混じって、偽物の死体を演じることとなった蒼神は、ただじっと息を潜めて成り行きに身を委ねるしかなかった。

「ひぐっ……博士が、ひぐっ……死んじゃった。フリージアが……殺しちゃった（泣）」

ペタペタペタ……

裸足で歩く悲しげな足音を残し、彼女はついさっき自分が突貫させた壁の穴から出て行った。

「……」

嵐が――――去った。が、青年はまだ動けそうにない。

（どういうつもりだ？　彼女を外に出すなんて……）

大勢の人間が死んだ。自分が成そうとしたことに協力した人達が、犠牲になってしまった。既に危機は去っていたが、彼の肉体はあまりに軽く失われる人命の現実に蝕まれ、しばらくは動けそうになかった。そして……

――――――――――　1週間後　――――――――――

一人の青年……『蒼神槐（あがみえんじゅ）』は自宅マンションのリビングで悩んでいた。刑務所で起きてしまった大惨事をきっかけに、蒼神博士は法廷での証言を拒否。それより以後、彼の周囲は静かになった。直接的な警護をする者はおらず、一日に数回、パトカーがマンションの周囲を巡回するくらいだ。

（ボクのしようとした事は、間違っていたのか？）

彼はＰＣのモニターを見つめながら自問した。法廷に立つと決めたのは、己の正義に迷いがなかったから。では何故、今の自分は証言を拒否し、自宅に引きこもっているのか？　全てが無駄になってしまった。なんとも単純な計算だ。

“個人が組織に勝てる道理は無い”

ただ……ただ一つだけ考えがあった。公の場で社会的な楔が撃ち込めないのなら、非公式の場で攻撃する。つまり、原告本人が直接調査に乗り出すのだ。ただし、単身乗り込んだりすれば、自滅することは目に見えている。先日のような事例がある以上は『護衛』が必要。そこでどうする？

（そろそろか……）

彼は時計を見て、胸に秘めた微かな期待を膨らませていた。『イレギュラー』――ネットで発見した調査会社のサイトだ。ＴＯＰ項目にはこう説明されていた。

＜個人を対象とした総合調査会社。警察ＯＢ・元軍人・情報機関出身者等で組織され、企業やそれに付属する団体、宗教組織、暴力団等からの警護、または直接的及び間接的な調査を目的とした、自治体公認の企業＞

……とある。一般のメディアでは聞いたこともない社名だったが、自分がこれから相手にしようとしている連中の事を考慮するなら、備えは必要。

――――ピンポ～ン♪

来た。

この瞬間から彼の反撃が開始される。昨晩、腕利きのエージェント二名をよこすとメールがあった。なんとも心強い。どんな屈強な男達が来てくれたのか。

ガチャ！

「……」

「……」

ミ～ンミンミンミ～ン！

街路樹でセミが鳴いている。ドアの向こうに看護婦と医者が立っ

ていた。
「……」
「……」
ミーンッ！　ミーンッ！
状況が上手く説明できないが、目の前に白衣の天使と女医が立っている。
「……」
「……」
ミンミンッ！　ミ～ンッ！
三人はいつまでも見つめ合っていて、何もしゃべらない。
「……」
「……」
――バタンッ！
蒼神博士は仕方ないんで玄関戸を閉めた。力強く閉めた。
ドンドンドンッ！　ドンドンドンッ！
「すみませーん！　『イレギュラー』から派遣されたモンでーす！」
「ウソじゃないですよー！　社員証もありますから開けてくださーい！」
ドアを叩きながらそう言ってるもんで、彼はもう一度開ける。
「……」
「……」
無言。
無言。
看護婦の方がラジカセを持ってる。再生ボタンを押した。流れてきたＢＧＭは『ラジオ体操第一』。
――バタンッ！
閉めた。
「わーッ！　待って、マジで待って！　こっから真面目だから！　ホントに真面目だから！」
ドンッ！　ドンッ！　ドンッ！

このまま放っておくと玄関戸の前でいつまでも叫んで、御近所から身に覚えの無いウワサが出そうなんで。

ガチャ――

「とっとと入ってください」

彼の戦いが始まった。

ナースと女医

＜速報です。昨今懸念されていた政府直轄の国営企業、通称『ＰＦＲＳ』で発生したとされるバイオハザードについて、ＰＦＲＳ側は「事故が起きたという事実は無い。職員による誤報である」と、変わらず事故を否定。政府は来週にもＰＦＲＳの幹部立ち会いのもと、公式調査を実施すると発表。今回の調査では……＞

テレビが昼のニュースを放送している。蒼神博士はリビングのソファに来客者二名を座らせると、冷茶を一杯出してやった。

「あの～……一つ聞いていいですか？」

「はい、どうぞ」

「その格好は何ですか？」

ものすごく切実な質問をしてみた。

「看護婦です」

「女医です」

呼称についてはどうでもいい。

「……どうしてそんな格好を？」

「趣味です」

「右に同じ」

ダメだコイツ等。

「これ、社員証です」

そう言って偽ナースが、顔写真付きのカードを一枚取り出して見せた。

「イレギュラー調査課エージェント・『汐華咲』さん？」

「はい、今年で１８歳になりましたッ！　つまり、ポルノ解禁ッ！」

ポルノ解禁はどうでもいいが、未成年がこんな仕事してていいのか？

「こちらもどーぞ☆」

女医も社員証を手渡した。
「イレギュラー調査課エージェント・『柏木茜（かしわぎ あかね）』さん？」
「はい、咲チャンとコンビを組んでる１９歳ッ！　コスチュームは手作りですッ！」
そう言ってニッコリ微笑んでいる始末。
「え～～……すみません、ちょっと確認しておきたいんですが……メールには“信頼のおけるベテランを派遣します”と、返信があったんですけど」
「そうは見えないと？」
「ええ、まあ……」
「はい、確かに。嘘メールですから」
ぎゃあああああああああああああああッ！！
「そ、それって詐欺じゃないですかッ！」
「申し訳ない！　あたし等どうしても仕事が欲しくて！」
「上司のＰＣで海外のエロサイト観てたら、偶然、蒼神さんのメールが届きましてェ。これはチャンスとばかりに……あはははははっ☆」
決して笑い事ではない。
「ちょっと電話してきます」
「待ってくださ――――――い！！」
おふッ！？
席を外そうとする博士めがけて、看護婦と女医がタックルしてきた。
「嘘ついた事は謝ります！　あたし達はただ、デスクワークとサヨナラして外に出たかっただけなんです！　この支配からの卒業なんです！」
言ってるコトは全く理解できないが、どうも面倒な話になってきた。
「もしかして……御二人は新人？」
「いえ、入社して２年近くになります。けど、調査の仕事はこれが

初めてです」
「……はい？」
「エージェントのライセンスは持ってるんですが、補欠なんです」
「そーなんです。ギリギリなんですぅ☆」
えらいコトになってきた。しかし、今ここで追い返そうとすれば、
「大声出して人を呼びます」と言わんばかりのツラなんで、黙認するしかない。
「そ、それでは改めまして……蒼神槐です。宜しく御願いします」
彼はそう言ってテーブルの上に書類の束を広げた。一番上には証明写真の貼られた博士自身の履歴書が。
「なんとッ、このツラで２３歳！？　てっきりあたし等とタメぐらいかと！」
「身長は？　体重は？　血液型は？」

ワイワイ、ガヤガヤ……

二人は履歴書の写真を指差し笑って、肘ついて。文句言って寝転がって、屁ぇこいたりで相談中。
（……これでいいんだろうか？）
宜しくない汗が博士の顔面より吹き出す。なんだかもうヤケクソまで秒読みだ。

――――　５分後　――――
「んッ！　よし、決定！」
「な、何がですか……？」
「本日より『童顔ニート』と呼びます」
ニックネームが出来た。
「い、いや……そんなことよりですね、ええっと……そうだ、テレビを」
仕事の話が微塵も進みそうにないんで、彼はＰＣをテレビにつな

ぎ、モニターを見るよう促した。
「職歴に記されてある通り、ボクは『ＰＦＲＳ』本部の元職員です。ＰＦＲＳで現在起きているバイオハザードについては、御存知ですよね？」
「知らんッ！　あたしは基本的に深夜アニメしか観ないッ！」
ナースがやたら偉そうに胸を張って返答する。
「コレって確か……海の上にある如何わしい施設で、マスコミにボコボコにされてる秘密組織だよ」
微妙にズレてはいるが、女医の方はまだ常識があった。
「ボクは１週間前、ＰＦＲＳに対して法廷で証言するハズでした。あそこで一体、何が起きているのか、一部始終を世間に公表するつもりだった……しかし、挫折しました」
「さぁてぇ、な～～にがあるかなぁ？」
ガチャ――
クライアントが真剣に話し始めた途端、ナースはキッチンめがけて這い出して、冷蔵庫のドアを勝手に開けたりしてる。
「ボクは一介の科学者に過ぎません。軍部とも繋がりのあるＰＦＲＳと本気で渡り合うには、武力も必要であると悟りました。だから、御二人には護衛としてＰＦＲＳ本部まで一緒に来て欲しいんです」
モニターに映る海上の巨大建造物……テロップには『ＰＦＲＳ本部施設』の文字が。蒼神博士は真剣な表情でモニターをビシッと指差した。
「おおッ、肉だ！　しかも国産牛肉だ！　あたしの勝利だあああああッ！」
何に勝ったかは知らんが、冷蔵庫に上半身を突っ込んでナースが喚いている。
「ええっとですねェ、まずはコレに数字を書いて欲しいワケでして、はい」
そう言って女医が紙切れを一枚取り出し、博士の前に差し出した。紙切れには『給与明細書』と書いてあった。手書きで。

「……ギャラですか？」
「いかにも」
「いや、でも……成功報酬は調査が完了し、必要経費が明確になってから請求書が送られてくるとサイトに……」
「え～～っと、うちの上司はこの件もちろん知らないワケで、バレると解雇。で、博士と仲良く契約。現金直接プリ～ズ★」
　要するに詐欺だ。
「不勉強で申し訳ないんですが、こういう調査一連の相場って、幾らほど……？」
「相場？　んんッ？　ねぇーッ、咲チャーン！」

　トントントントン、グツグツ、ジュワァァァ……

　キッチンの方から手際の良い音が聞こえてくる。
「何じゃい！？」
「わたし達の仕事って、幾らぐらいもらえるのかなァ？」
「こりゃ！　子供がお金の話なんてするもんじゃありませんッ！　それよりこっち来て手伝いなさいッ！　今日のランチはステーキだぞッ！」
　今からでも遅くない、通報しよう……博士は心底そう思った。

＜今回派遣される調査班には、情報機関の関係者が含まれているとの報道もあり、極秘裏に開発された、ＢＣ兵器による事故の可能性も視野に入れているのでは、との声もあります。ＰＦＲＳのオーナー・『魅月紫苑（みつきしおん）』氏が昨日行いました、記者会見の模様をご覧ください＞
　攻撃的で鋭い目つきをした、顔色の悪い男性がモニターに現れる。５０代前半くらいだろうか、徹夜明けの営業マンみたいにスーツをヨレヨレにしている。
＜皆さん御存知の通り、ＰＦＲＳの本分は新薬開発のコンサルタン

トと軍用兵器の設計であります。マスコミの間で流布されている正体不明のウイルス漏洩や、軍部の陰謀説などは事実無根です。ＰＦＲＳは創立から２０年程の若い企業のため、社会的に至らない箇所もあるかもしれませんが、国民の皆様に貢献できるよう、日々努力しております＞

＜先日の元職員による告訴撤回に関しては、どう御考えですか？＞

＜企業が大きくなれば、必然的に賛同者と反対者の区別が生まれます。己の無知蒙昧を棚に上げて、企業を批判する輩はいつの世にも後を絶ちません。今回はその愚かな輩が、ギリギリで自分の過ちに気付いたという次第です。もちろん、法廷に立った場合、我々は徹底抗戦する準備ができています。正しい者は決して逃げ隠れしない＞

記者達の質問に対し発言する中年男性は、自信に満ちている。

「この男がＰＦＲＳ本部における元上司です」

博士は溜め息まじりに呟いた。

「フムフム。つまり、この不健康そうなオヤジが敵のボスか。モグモグ」

テーブルにはステーキ定食が二人前。家主の同意は無視。

「『敵』って……ボクはただ、ＰＦＲＳの隠蔽体質を糾したいだけです。直接的な交戦なんて考えてません」

というより、この二人に一流ＳＰのような働きを期待しても仕方ない。ＰＦＲＳのバックには軍部がいる。物理的交戦となれば、特殊部隊の一個大隊くらいは必要になるだろう。

＜今回の告訴内容についてお聞きしても？＞

記者の一人が核心に迫る質問をした。

＜告訴の内容については彼女に詳細を説明してもらいます＞

カメラが移動して、魅月氏の隣に座る白衣姿の女性を撮る。

ブウゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ――――――――ッッッ！！

冷茶を飲んでいた博士が盛大に吹いた。噴射の反動で仰け反った。

虹が出来た。
「こりゃあああああッ！　食事中に行儀の悪い子だねえ！」
ナースがプリプリ怒ってる。
＜告訴の件に関しましては、原告側との和解が成立しております。本件は軍内部の情報が扱われているため明言は避けますが、今後は軍部の広報より随時皆様に御報告があると思われます＞
房状の後れ髪が特徴的な黒髪のポニーテールで、フォックスタイプの赤縁眼鏡をかけている。テロップには『ＰＦＲＳ上級職員・３４歳』と出ており、名前は何故か伏せられていた。
＜軍部の機密事項に該当するということですか？＞
＜そうです＞
＜責任者はどなたですか？＞
＜私からは御答えできません＞
名無しの美女は記者の質問を突っぱねる。蒼神博士はやりきれない表情で、テレビの電源をオフにした。
「ボクのＩＤは当然もう使えません。つまり、ＰＦＲＳ本部に潜入するワケですから、政府施設への不法アクセスの罪で逮捕されます。それを踏まえた上で判断していただきます……同行できますか？」
正直なところ、この二人には来て欲しくない。手違いとはいえ、こんな未成年の女の子に犯罪の共謀者という履歴を加えたくない。だから、博士はトドメに言及した。
「１週間前、ボクはＰＦＲＳが送り込んできたヒットマンに襲撃されました。武装した刑事達がたくさん殺されました。ボクはこうして運良く難を逃れましたが、次も上手く回避できるという保障はありません……それでも一緒に来てもらえますか？」
誇張しているつもりはない。事実をありのまま真剣に述べた。
「えッ……人が死んでんの？　ええっと、それはちょっと……ねぇ？」
「アハッ、ハハッ……補欠の初仕事にしてはハードかも（汗）」
二人は微妙に気まずい空気を漂わせ、目を見合わせている。

「どうされますか？」
彼は矢継ぎ早に追い立てる。
「え？　あ、ああ……ちょっとごめんなさい。事務所に戻って上司と相談してみます」
「そ、そうだよね……契約書類も持ってきてないし……アハッ、アハハハ（汗）」
両エージェントは引きつった笑顔で立ち上がり、玄関の方へと後退して行く。
「あの～～……上司に経過報告を入れなきゃならないんですけど、明日はどちらに？」
半開きにした玄関戸から、顔だけ出してナースが問いかけきた。
「東部ベイエリアの港に行きます。ソコから客船に乗りこみます。周囲に一般人が多ければ、先方もあからさまな行動には出られないでしょうし」
「そうですか……じゃあ、また！」
バタンッ！
――――――帰った。
「さて……と」
博士はもう一度テレビの電源を入れ、モニターを見つめた。記者会見のニュースはまだ続いているが、オーナー・魅月氏と白衣の女性の姿は無く、広報の人間がつまらない言い訳で凌いでいる。
「結局、ボクだけか……」
孤独な戦いへと前進する決意をかためた。

シスターと神父

――――――――　翌日　――――――――

ブオォォォォォォォォォォォォォォォォ〜〜……

のんびりとした汽笛が聞こえる。潮風に乗った海鳥が太陽の下で輪を描き、青空の中を優雅に泳いでいる。正午ちょい……初夏の堂々とした陽射しを受け、港では出航を控えた巨大な船が泊まっていた。『サテュロス』と呼ばれる巨大豪華客船で、メインデッキの温水プールでは、Tシャツ・短パン姿の蒼神博士がパラソルの陰に隠れ、デッキチェアに腰を下ろしてラップトップを立ち上げていた。

――――――――　『神の設計図（バイタルズ）』における検査結果　――――――――

ディレクトリーの一つをクリックする。

＜記述者不明……神の設計図（バイタルズ）を構成するタンパク質は、数十のアミノ酸配列により一次構造を形成しており、二次構造は、他の動植物に見られる筒状構造とも板状構造とも似ておらず、三次構造において、ある程度のパターンが見受けられるが、未だに類型化には至らず、構造と機能の相関はハッキリしていない＞

＜記述者不明……神の設計図（バイタルズ）より抽出されたタンパク質を使用して、臨床実験を行う。何度かの実験により、以下の特質を発見。1・動物実験は全て失敗したが、人体実験はわずかながら成果を収めた。2・生存する被験者は、皆同様にその肉体機能を画期的に向上させた。特に免疫機能は秀逸。物理的ダメージ・高熱・寒冷・細菌・ウイルス・毒物等に対する抵抗力は、常人の数倍。3・このタンパク質を培養することにより、新しい生命を確認。原始生命に酷似した

成長パターンを経て、多細胞生物に変化＞

＜記述者不明……神の設計図（バイタルズ）を管理する海底エリアの監視モニターが、異常を確認。特定の上級職員との接触の際、原因不明の振動現象が発生。電気的な反射と思われる＞

＜記述者不明……軍部より極秘のアクセス有り。神の設計図（バイタルズ）を軍のＰ４施設にて預かりたいとの依頼。私は反対した。一部の組織が秘密裏に所有して良い物ではないと判断。協議の末、極地に研究施設を整え、隔離するという決議案が採用される。これは軍上層部から紹介された将校からの提案で、建設費用の全額負担を申し出たらしい＞

「コレのせいでボクは職を失った……」

彼は短い黒髪をガシガシとかき上げて目を細めた。これから自分が成そうとしている事を、常に心の中で自問し続けなければ落ち着かない。そんな時間がやたらと増えた。

（ボクは殺されかけた……そう、殺されかけたんだ。また表に出ようとすれば、軍が本気で動くかもしれない……拉致？　殺害？）

ハアアアアアア……

とても重くて長い溜め息が流れた。

（一個人が大組織に勝てるのか？　……可能か？）

――パタンッ

ＰＣを閉じた。面前に広がる自分とは無関係な光景に溶けてしまいたかった。

水着のセレブがはしゃいでいる。

プールサイドを無垢な子供達が走り回る。

日光浴に、彩色豊かなソフトドリンク。

デッキブラシでせっせと掃除するシスターと神父。

水平線の向こうには……

「――――て、アンタ等何やってんですかッ！？」
鼻息を荒げる蒼神博士が二人の前に仁王立ち。
「密航ッ！！」
二人はそう言った。
ゴシゴシ……ゴシゴシ……
孤独になるハズの旅に汐華咲と柏木茜がプラスされた。

「何じゃこりゃあああああああああああああッッッ！？」
バカが一匹、客室で絶叫した。
「ショック・ザ・神の僕！！」
続けて二匹目。
蒼神博士は再会してはいけない連中を引き連れ、自室に戻った。あのまま二人を世間様にさらしてはいけない……そんなオトナの真心から。で、入室するやいなや、冷蔵庫に頭を突っ込んでいるのが汐華咲（何故かシスター姿）。身長は１６０センチ前後くらいで、非常に短く切りそろえた黒髪が特徴的。衣装のせいで体格はよく分からないが、スリムっぽい。一方、寝室のマットレスを寝転んで吟味しているのが柏木茜（何故か神父姿）。背丈は咲より頭一つ分くらい高く、栗色をしたミディアムの姫カット。衣装の上からもハッキリ分かる腹部ポッコリさん。体脂肪率は４０％くらいありそう。
「……で、どうして密航なんか？」
「ぬッ、神々しい生肉を発見！　ダイレクトにいってくれる！」
「ふにゃ～～、たまんな～～い☆」
人の話を聞け。そして、牛肉に塩をふるな。
「会社に報告しなかったんですか？」
「しましたよ。きっちりと」
「じゃあ、どうして！？　死人が出ているんですよ！！」

「上司からは“だったら死んでこい”って言われました」
「……は？」
「つまり、死にに来ました」
開封済のワインボトルを握り締めながら、シスターが胸元で十字を切る始末だ。こうなってしまっては、この二人同伴でＰＦＲＳ本部へ潜入するしかないワケで……。
「いいでしょう！　こうなってしまった以上、今からボクはアナタ達の正式なクライアントです。よって、ボクの言うことは絶対守ってもらいますッ！」

ゲフっ……
ブッ……

ゲップはするし屁はこくし、最低の返事が返ってくる。
「まず一つ！　ボクの指示なくして勝手な行動をとらない！」
ビシッと人差し指を突き出して一喝。
「二つ！　御二人にはＰＦＲＳ本部の手前で本土に帰ってもらいます！」
ビシッと二本目の指を立てる。
「神に誓って！」
「右に同じ！」
うわあぁぁぁ……コイツ等、約束破りたくてウズウズしてる。
（巻き込んだのはボクだ……責任は負う）
彼は人並みに保護者としての責任に似たモノを感じていた。
「そういえば、ギャラの交渉が途中でしたね」
旅行カバンの中から財布が取り出された。ブ厚い。札を入れる部分がやたらブ厚くなっている。援交っぽい画になってなんかイヤラしい。
「スゴイよ咲チャン！　お財布がピッチピチで苦しそう！」
「おのれッ、この非国民めッ！」

床に正座して、天に両手を差し出しつつも文句をたれるシスター。
「ええっと……そういえば、幾らくらい払えばいいんでしたっけ？」
「スンマセン、質問があります」
質問したら質問で返された。
「はい、何か？」
「大きな数字ってよく分からないんで、物に換算した場合……上カルビ何人前食える？」
「執事喫茶何回通えますゥ？」
そんな価値基準でいいのか？
「……では、依頼料の件は後日イレギュラーと交渉ということで」

カチャカチャ、カタカタ……

蒼神博士はＰＣをテレビにつないだ。
「よく観ていてくださいね」
テレビモニターに映し出されたのは、海洋に浮かぶ正方形状の巨大な環境都市。その中央には、黒光りする高層ビルがそびえ立っている。
「当時はまだ実験段階だった『マリンコロニー』のシステムを導入し、ＰＦＲＳは４年かけて建造されました。資金の殆どを軍部がバックアップしているため、全ての設備が軍仕様で、テロリストやハッカーへの対策は万全。海上・空域ともにレーダー探知されており、認証コードを持たない所属不明の機体が接近すれば、即座に軍へ通報されます」
「あたしの知り合いに、『夜のレーダー技師』って呼ばれているヤツがいます」
そりゃただのストーカーです。
「かと言って、海中は広域海底火山の影響で巨大な岩が出っ張り、潜水艦による接近も難しい」
「わたしの知り合いに、『夜のソナー技師』って呼ばれているヤツ

がいます」
　そりゃただの盗聴マニアです。
「そこでボクの立案した作戦ですが、ＰＦＲＳ本部から最も近い港には、メンテナンス用の海底トンネルが本部の発電施設までつながっています。そこを歩いて行きます」
「はいは～い、警備とかは？」
「問題ありません。海底トンネルの存在は、政府が契約する特定の業者と、一部の上級職員しか知りません。ただし、ボクのＩＤはどうせ使えないんですけど」
「つまり、あたし等は海底トンネルの出口まで付き合えばいいってコト？」
「でもォ～～、ＩＤが無効ってことは入り口で立ちんぼ？」
「大丈夫です。政府指定の業者の一人が、ボクの話を聞いて協力してくれることになりまして。港で落ち合う予定です」
　彼の心の中で、まだ弱々しかった決意がギュッと引き締まった。
「で、具体的にＰＦＲＳとやらで何が起きてるんですゥ？」
　神父もワインのボトルを発掘し、それはもう手慣れた感じでグビグビグビッ。
「このバカ！！」
　ばしッ★
「あうッ！」
　シスターが神父をぶつ。そして、小芝居。
「飲酒はハタチを過ぎてからって、いつも言ってるでしょ！」
「ご、ごめんなさい……わたしが間違ってた！　久しぶりの合法的な食事にうかれてた！」
　――ヒシッ☆
　抱き合う酔っ払い共。シスター、オマエも未成年だぞ。
「ＰＦＲＳ本部ビルのＰ４施設で、バイオハザードの一種が発生しています。職員十数名が、正体不明の『何か』に感染しました。本部はその事実を隠蔽しているのです」

蒼神博士は面前の小芝居をバッサリと無視し、話を進める。
「それ以外にも、国外から不法滞在者やホームレスを拉致し、違法な人体実験を行っています。私も立ち会ったことがあります……遺体は溶解処理され海に流される。被験者の個人情報は、この世から全て消されます」
「ほう、そりゃけしからんな」
腰に両手をあてて窓から大海原を眺めるシスター。その背中は堂々としている。酔っ払ってるけど。
「バイオハザードの原因は、『神の設計図（バイタルズ）』にあると推測しています」
モニターに映される怪物体。
「ばいたるず？　若手か？」
芸人ではありません。
「『神の設計図（バイタルズ）』とは……２０年程前、現在のＰＦＲＳ本部が位置する海域にて、地殻変動により海底から吐き出された正体不明の遺物です。人間の造形と酷似していて、半透明の全身には人体を構築する組織全てが正しい位置に在り、電子顕微鏡を使用してはじめて確認できる、微細な箇所まで正確に造られています。つまり、『人類の完璧な標本』――いえ、コレを最初に精密検査した科学者は、“人類を創り出すための完璧な設計図”と考えました」
モニターに映った怪物体をジッと見つめる咲と茜。そして、感想。
「男？　女？」
「大人？　子供？」
特にどうでもいい様子。
「先日も申し上げましたが、ボクはヒットマンの襲撃を受けました……この船も１００％安全というワケではありません」
「はッはッはッ！　そのためのあたし等です！」
「博士の盾となり武器となり、情婦となりますゥ☆」
結構です。

優雅な船旅と喧騒の予兆

「で、博士は自分の元職場をどうしたいワケ？」
シスターは相変わらず腰に両手をあてて、大海原に視線をやっていて、何だか背中が大きい。
「間違いを正したいんです」
彼は実に分かりやすく断言した。
「何で？」
「……え？」
予想外の切り返しに博士が唖然とする。
「ＰＦＲＳは国が管理する正当な研究機関なんです！　それを一部の職員が私物化して、違法な実験を行うなど以ての外です！」
博士は身振り手振りもまじえて熱く語る。
「要するに“白”という正義があって、“黒”という正義とぶつかってる。お互いが正しいと言って譲らないワケだ」
「ＰＦＲＳの非道に『正義』なんかありません！」
「使われない核兵器に悪意は無し。例え使ったとしても、爆発の瞬間や死体の山を撮った映像を確認しない限り、人は『悪』を定義しない」
「閉鎖的空間の中で行われた暴挙は、公に認識されなければ『悪』ではないと！？　それは違う！　悪意は確かにソコに存在しています！」
咲の物言いに対し、蒼神博士はつい向きになって声を荒げた。
「まあまあ、落ち着いてくださいなァ☆　咲チャンちょっぴり酔っちゃってるんで☆」
「そのとーりじゃ！　褒美として除湿剤に溜まった聖水を頭からかけてやろうぞ！」
「やめてェェェェェ！　楽しいけどやめてェェェェェ！」
バタバタバタ……

（ボクは何に負けたんだろう？）
命を狙われた。政府機関を敵に回した。さあ、示そう。自分こそ真の『白』であると。
「博士――――ッ！」
「えッ？　あ、はい……」
いつの間にか金属バットを片手に構えたシスターが、元気良くクライアントを呼びつける。彼女の足元には神父が倒れてたりするし。頭部から流血してたりするし。
「あたしもう飽きたッ！」
そう言ってバットをブンブン振り回す。
「……あ、あの～～、ここから更に重要な説明を……」
「主は申されましたッ！　エロゲーにオチはいらんとッ！」
ドコの主だ。
「要約するとですね、わたし達ボディガードは右脳も左脳も使わないから別にイイじゃん……ってトコロですゥ♪」
血みどろの神父が笑顔で言及。コイツ等、やっぱダメだ。
「……それじゃ、メインデッキのプールで遊んでてください」
彼は週末のお父さんみたいな声をもらした。
「そいつは無理だ！　水着が無い！　以上ッ！」
――バタンッ！
そう言い残してシスター、退室。
「わたしは一応、水着持ってますけど……でも、きゃは☆」
――バタンッ！
謎のリアクションで神父も退室。
「あの……ボディガードは？」
一人とり残される始末。博士は仕方ないんで、ギャラリー抜きの説明を続ける。
＜午前・１０時２４分＞――モニターに映るのは監視カメラの映像。巨大な水槽の中に佇む神の設計図（バイタルズ）。その前に立ち尽くす蒼神博士の姿。

（有機物の塊……しかし、動力源は？　脳の一部で何だかの電気信号を確認したが……）
口元に手をあてて、モニターの前で考え込む博士。そして――
＜ジカン・ヲ・ムダ・ニスルナ。ハヤク・ミツケ・ロ＞
しゃべった。人体模型（バイタルズ）が口も動かさず言葉を発した。
（「見つけろ」？　一体、何のことだ……？）
カコッ
キーを打ってファイルを閉じた。とにかく情報が足りない。いずれにせよ、本部への潜入なしには回答は得られない。彼は深く息を吸って目を閉じた。

――――――――　で、その日の夕方から夜にかけて　――――――――

廊下で金属バットを振り回し、子供達を追い回すシスターを見かけたり。神父がバスルームから卑猥な声を発してたり。メインデッキで牛丼を立ち食いしているシスターを見かけたり。神父がキッチンで焚き火をはじめて警報が鳴り出したり。船尾でゲロ吐いてるシスターを見かけたり。神父が酔った勢いで首吊り自殺をはかったり……蒼神博士の孤独なようでやかましい船旅の1日目が終わろうとしていた。
「あ、あの……茜さん……」
「なんざましょ？」
「クライアントの立場から言わせてもらいますが、ソコはボクのベッドです」
夜も更け、乗客の皆様が就寝しだす頃となり、博士はビシッと文句をつける。
「はいはいそーですとも。さあ、どーぞ★」

茜はベッドの上に寝そべって博士を誘う。
「いや、そうじゃなくて……どいてください」
「ひどいッ！　体脂肪率の高い女の子をベッドから引きずり出して、寒空に放り出すおつもりッ！？」
真夏です。
「ソファじゃ駄目ですか？」
「ダメ。わたしの様な乙女は、高級マットレスを使ったベッドで寝ないと爆死します」
そんな乙女はいません。
「と、とにかく……色々とマズイですからどいてください！」
蒼神槐・２３歳、赤面。
「い～や～だ～よ～～～★」
「……よーく分かりました。ボクがソファで寝ます」
クライアントが寝室から追い出された。スゴスゴと撤退する博士の後ろで、快適さにのたうちまわる茜。
（……ん？）
彼は妙な光景を目にした。リビングの片隅で壁を背にして膝を折り、背中を丸めて座り込んでいるシスターが。
「何をされてるんですか？」
「あたしも寝る」
「そんなトコでですか？」
茜とは違い、まだコスプレもしたまんまだ。
「博士ェ～～、咲チャンのことは気にしないでェ～～」
マヌケな声がそう告げる。
「そうそう、気にしない。とっとと体を休めてちょーだい。あたしゃもう眠い……」
――――カクッ
首がうな垂れ、すぐに微かな寝息が聞こえだした。寝つきが良いというより、まるで即死だ。
ピッ――

照明を落とす。部屋中に淡い闇が広がる。カーテンの隙間から月光が僅かにもれる。

（疲れた……本当に疲れた……）

蒼神博士はソファの膨らみにその身を沈め、目を閉じた。客船に乗って予定外の心配事が増えてしまったためか、心労で意識が溶けるのに時間はいらなかった。豪華客船のあらゆる箇所から、灯火が消えていく。とても静かに消えていく。船底にぶつかる細波から、海中の生物達の寝息まで聞こえてきそうな夜。

潮風が……止む。

「すぅぅぅ……すぅぅぅ……」

１０分も経たない内に、客室は三人の寝息ですっかり満たされていた。殆どの客室で、成金共が心地良い夢の中にトリップしはじめた頃……

ヒュンヒュンヒュンヒュン――

夜の帳が震えだした。金属の羽が大気と薄雲を裂く。

ヒュンヒュンヒュンヒュン――

ヘリだ。民間用でも報道用でもない。かといって、攻撃的な装備も見受けられない。

ヒュンヒュンヒュンヒュン――

とても静かに飛んでいる。チューンアップされた無音ヘリだ。ヘリはゆっくりと高度を下げはじめ、客船の真上に位置をとる。

ヒュンヒュンヒュンヒュン――

メインデッキのプールの水面に小さな波を作りながら、ヘリポートへ着陸した。そして、降り立つ者。数は四人。出迎える者などダレもいない。ダレもこの来訪者達に気付いていない。乗客然り、船員然りだ。四人は一言も発さず、辺りを見回している。全くもって――静かだ。人も海も月も、善意も悪意も、等しく堕ちて――。
蒼神博士はクッションをしっかり抱いて――。
茜は満足感あふれる笑みをこぼして――。

咲は――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――
「……さて」
――――――――――――――――――――――――――――――――――
――――動。

強襲者と迎撃者

「こちらチーム・α、到着した」
＜了解。行動に移れ＞
ヘリから現れた内の一人がインカムで応対し、他の三人に目配せする。四人とも真っ黒なスーツにサングラス。しっかり磨かれた革靴に地味なネクタイ。男性二人に女性二人のチーム。ヘリはすぐに離陸し、インカムをつけたスキンヘッドの男が、上着の内ポケットからＰＤＡを取り出した。
「博士の部屋は？」
「４階の４１０号室よ」
「俺とプリエステスで部屋に向かう。タワーは東口を、エンプレスは西口をおさえろ」
「了解」
「さっさと済ませて帰ろうぜ」
「同感ね」
指示を受けた来訪者達が散開しようとしたその時。

「えいめ～～～～ん★」

――――――ッ！？
彼等の死角から彼等意外の声がした。四人が振り向いたその先……ヘリポートの隅っこに佇む影が一つ。右手を真っ直ぐ真横に伸ばしてしゃがむ、不吉な人影。
「……ダレだ？」
「神の下僕」
薄雲が裂けて淡い月光が降り注ぎ、その姿を称える。
汐華咲が――――そこにいた。

「う……んんん……？」
不意に差し込んできた月明かりに目を射られ、ソファに横たわる蒼神博士がゴシゴシと目をこする。
「……ん？」
彼はムクリと上半身をもたげ、半開きの目で辺りをキョロキョロ見回して――――パタッ。
再眠。

「我々はＰＦＲＳ本部より派遣された者だ。危害を加えるつもりはない」
「ＰＦＲＳ？　ほほう……つまり、クライアントの『敵』ってワケか」
シスターの眼光が不敵に輝く。
「もう一度聞く。貴様はダレだ？」
チームリーダーと思われるスキンヘッドの中年男が、毅然として立ち塞がる。
「神に仕えし敬虔なる尼僧に対して、攻撃的意志を察知ッ！　主は御許しになりませんよッ！」
会話になっていない。
「エンプレス、拘束しろ」
「いいの？　相手はマヌケな民間人のようだけど」
「構わん。本部には俺から話す」
「はいはい、了解」
額にバンダナを巻いたブルネットの女が、咲に歩み寄り肩をつかんだ。
「さあ、来なさい」
「断じてイヤです」
「痛くされたいのかい？」
「罪深き者よ、悔い改めなさい」

――――ドゴッ！！

「――――ッ！？」

人間の体に何か硬い物体がぶつかるような音がして、『エンプレス』と呼ばれた女の体が宙にブワッと浮き上がり、そのまま地面に叩きつけられた。

「……どうなっている？」

一瞬、他の三名が息を止めて固まる。シスターが生脚ムキ出しにして中段蹴りを放ったから。

「タワー、手伝ってやれ。ただし、銃は使うな」

「ああ、分かってる」

今度は『タワー』と呼ばれたロングヘアで長身の男が歩み寄って行く。その間にも一撃を食らったエージェント・エンプレスが、ムクッと起き上がる。

「調子はどうだ？」

「やかましいッ」

エージェント・タワーの揶揄を振り払い、目標めがけて正拳突きを放つ。シスターは右手でソレを払いのけ、矢継ぎ早に繰り出された頭部への回し蹴りをしゃがんで避け、その姿勢から水面蹴りを放ち、相手をまた転がす。

「このガキがッ」

転がる仲間の脇を通り過ぎ、タワーが素早く咲との間合いをつめると、下段から中段へとつながる連続蹴りを繰り出し、咲の両手を防御に使わせ、一瞬の硬直時間をついて跳び込み気味のパンチを突き出した。

ゴッ――！

「ど～～～よ？」

シスターの高々と上げられた膝がパンチを受け止める。タコみたいに柔軟なボディだ。

そして、反撃。

ドゴッ――――！
「くっ……」
防御に使った脚をそのままの高度で素早く伸ばし、つま先に力をこめて相手の喉に突き込んだ。タワーは2、3歩退いたが、バカにするようなシスターの仕草にイラついて、無造作に飛びかかる。シスター、反転。体をストンッと落とすようにして地に両手を着き、絶妙のタイミングでカンガルーキック！！
「おぐッ！？」
まともに命中し、背広をクシャクシャにしながらタワーも転倒。
「行くぞ」
今度はスキンヘッドの男と、ドレッドロックスの『プリエステス』と呼ばれた女性エージェントが動く。
「来いよ来いよ来いよ来いよッ！」
挑発しつつシスターは回れ右ッ！　そしてダッシュ！
踵を返した彼女の背を、エージェント二人が追う。走っていくその先にはプール。もちろん――――ダイブ。

バッシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！

派手に飛沫を上げて沈む、沈む、沈む……ブクブク。

「んん……むぅぅ……？」
茜がベッドの上でゴロゴロと寝返りをうつ。シーツに巻かれて春巻き状になる。体が締め付けられて苦しい。特に腹部が苦しい。
「うぅぅ……うぅぅ……ふヒぃぃぃ……」
脂汗が全身から抽出されて、天然油で揚げ春巻きが出来そうだ。
ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ
彼女は渾然とした意識の中で、心臓の鼓動の高まりをハッキリと感じていた。月明かりは茜の顔面にも降り注がれ、不吉な空気の発

生を伝えようとしている。
「……ぁ」
ガバッ――！
起きた。
「エロォォォォォォォォ――――――――い！！」
トテトテトテ……
意味不明な寝言を口走り、ゆっくりと歩き出した。
ゴソゴソゴソ……
収納スペースから旅行用の特大スーツケースを引っ張り出す。
「あ～～～う～～～……眠ぅぅぅい……」
どう見ても寝惚けた状態。彼女はスーツケースを引きずりながら客室から姿を消した。

ブクブク……ブクブク……
プールを囲む夜間遊泳用のライトがつけられ、飛び込み現場を照らし出す。
「どうするエンペラー？　手をこまねいているヒマはないよ」
「……仕方ない、行くぞ」
スキンヘッドの中年男……エージェント・『エンペラー』は仲間に手で合図し、プールサイドから離れていく。が、エンプレスだけは自動拳銃（オートマチック）を抜いて、プールの水面に銃口を向けた。
「よせ、エンプレス」
「どうして？」
「余計な痕跡を残すな」
「あんなフザけたガキに……やられたまま引き下がれるかッ！」
「冷静になれ、バカ者。消音器（サイレンサー）もつけずに発砲する気か？」
「……っ、分かった……」

パシュッ！！

「なッ――――――！？」

エンプレスがプールの水面から視線を逸らしたその瞬間、彼女の親指が千切れ飛んだ。

「くぅぅあァァァ！！」

拳銃が地面に転がり、垂れ落ちる血が赤黒い華をつくる。

「何だッ！？」

数秒遅れて他の三人が事態の異常に気づき、一斉に拳銃を抜いた。

「何時だと思ってんのよォ～～～……」

遠くの方に放置されたデッキチェアに人影が。目をゴシゴシしながら文句をたれる神父様、柏木茜その人。手には消音器（サイレンサー）付きの自動（オート）拳銃（マチック）が握られていた。

「プールに沈んだガキの仲間か！？」

「え～とね……わたしは柏木茜ッ！　１９歳のＯ型ッ！　趣味は年下の男の子にエッチな質問してドキドキさせることッ！」

注目された途端に眠気が吹き飛んだらしく、無駄にハイテンション。

で――

ズルズルズル……ズルズルズル……

ドコにあったかは知らんが、神父は地引網を引っ張り出してきて、プールへ投げた。

「……」

「……」

予想外の展開にエージェント達は沈黙。３、２、１、ズ～リズ～リ……手繰り寄せられた網にかかっていたのはもちろん、ズブ濡れのシスター。

ビチビチッ、ビチビチッ！

跳ねてる。活きが良い。

「連中を海へ投げ込め」

エンペラーの合図でタワーとプリエステスが拳銃を片手ににじり寄る。
「はい、ストップ！！」
網の中から這い出たシスターが、両手を高々と上げた。
「……？」
タワーとプリエステスの両名が思わず足を止める。
「あたし等は仕事の都合上、不審者を船の中に入れたくない。で、そっちはうちのクライアントに用がある。このジレンマを打開するには……さあ神父様ッ！　言っておやりッ！」
「モザイクは人類の立派な文化だコノヤロー！」

ズブっ……

シスターの指が凶器となって神父のデリケートゾーンを直撃。
「おォォォふゥゥゥ〜〜……（泣）」
悶絶。
「1対1で来な。勝者は船の中へ、敗者は去る」
シスターがものすごく真剣な眼差しで言う。
「貴様等が約束を守る保障は？」
「特には無い」
「……いいだろう」
エンペラーは拳銃をホルスターに戻し、サングラスを外して一歩前に出た。
「二人とも下がれ」
「……了解」
場の空気を察知して、タワーとプリエステスが退く。
「茜、分かってるね？」
「はいは〜〜い。正々堂々だぁ〜〜い好き☆」

パシュッ！　パシュッ！

「――――ッ！？」
タワーとプリエステスが銃弾を食らって続けざまに倒れ伏す。
「貴様等ッ！？」
“特には無い”って言ったでしょうが、この阿呆ッ」
咲はズイっと一歩前に出て右手を突き出すと、人差し指でチョイチョイっと挑発した。

船上の激戦と静かなる監視

「外道がッ」
ガシャ……
憤怒の表情でエンペラーは外したサングラスを握り潰す。そして、彼の両脇では……
「ありゃま」
咲と茜が瞠目する。凶弾に倒れたハズのエージェント両名が、ムクリと起き上がった。
「防弾スーツかね？」
しかし、胸元からは血が滲み出ていて、Yシャツを赤黒く染めている。
――ダッ！
タワーとプリエステスは左右に別れて弧を描くように疾走し、一瞬時間をおいてエンペラーが跳び上がり、宙を舞う。これに対してシスターの前に神父が滑り込み、飛び掛って来るエンペラーを迎撃。9ミリ弾が彼の二の腕をかすめるが、着地と同時に拳銃を蹴り飛ばされる。
「こりゃま」
シャッ――
袖の中から手の平サイズの予備銃（バックアップ）が滑り出し、エンペラーの額を狙った。が、彼のアクションに気を取られた神父の側頭部に、プリエステスが銃口をゴリッと押しあてる。シスターの背後をとったタワーは彼女を羽交い絞めにする。が――
「せいやあァァァァァァァ――――――――ッッッ！！」
「うおッ！？」
ブオッ――――！

羽交い絞めにされたまま、上半身を８の字を描くようにしてブンブン振り回し、タワーの拘束を力任せに引き剥がしてしまう。
「そしてぇぇぇぇぇ！」
無理矢理引き剥がされ、空中に投げ出されたタワーの胸ぐらをガッチリつかみ、巴投げの要領で投げる……神父めがけて。
「逝けやあああああああッ！」
と、シスター。
「来いやあああああああッ！」
と、神父。
二人の息はピッタリだ。

ドガッ……

神父にタワーが丸ごと命中。
「……ゴメンね！」
シスターは気を取りなおして構え直す。倒れてピクピクしてるパートナーはほったらかしで。
「どうあっても邪魔する気？」
「神様は見てますからッ！」
ダンッ！
カナリ低い姿勢でプリエステスがタックル――――速いッ！
「マジっスか！？」
タックルを仕掛けた彼女の背を蹴って、エンペラーがまたもや宙に舞い、シスターの顔面めがけて突き刺すような蹴りを放つ。これを素早く回避するが、わずかに崩した体勢のスキをついて、プリエステスのタックルがクリーンヒット。
「だあァァァァァァ～～～～ッ！！」
まともに食らって背中を地面に擦り付けながらブッ倒れる。
「イタイっ！　イタイっ！　背中がイタアツイ！　アツアツっ！
かゆいうま！」

とにかく大変だ。
「このガキめッ」
プリエステスがマウントポジションをとった。
「コレを見なさい」
彼女はシスターを見下ろしながら、自分の胸元をガバッとはだけさせる。9ミリ弾の直撃による生々しい出血……その弾痕めがけて自分の指を突っ込んだ。
グシュグシュ……
「おいおい……」
シスターの頬に血の滴が垂れてきて赤黒く汚す。何の苦痛も感じてないような表情……やがて傷口から。
――コトンッ
弾丸が素手で摘出された。
「我々は『強化人間（ブースト・ヒューマン）』よ」
「ほわっつ？」
シスターに難しいカタカナは通じません。頭がパカリと割れました。脳には“恋せよ乙女”と書かれていました。意味は不明。
「特殊な投薬処理で運動能力と免疫機能を人工的に高めた人間よ」
「なるほど、なるほど……わかりませんッ！」
「……」
ガッ――！
少々イラつき気味に咲の頬を拳で打った。
「やりやがったなッ」
シスターの口元が歪んだ。
グイッ！
「うッ！？」
「こんな展開どーよ？」
ネクタイをつかまれて強引に引き寄せられ、お互いの顔面が肉迫する。そして――
ガブっ！！

「あぐッ！？」
プリエステスが苦悶の声を上げ、上半身を大きく仰け反らせた。
「せいやっ！」
怯んだところに腰を突き上げて敵を引き剥がす。
「クソガキがァァァ……（怒）」
鼻から大量出血。つまり、噛みつかれた。
「野蛮人だーっ、野蛮人が出たぞォォォ！」
ほったらかしになってた神父が遠くの方から野次をとばす。
「神を冒涜する子羊には、ちょっと天罰がすごかったりするよ～～★」
シスター、本気。

「この二人は何者？」
ＰＤＡのモニターを見つめながら白衣の女が呟く。モニターには現在、客船のメインデッキで発生している攻防の様子が、監視衛星を通じて送信されていた。
グゥオオオオオオオオオオン……
エレベーターが重苦しく唸って、ゆっくりと降りていく。海中を垂直にはしった巨大なシャフトを移動して、海底に建造されたＰ４施設に到着した。
「……ふぅ」
ドアが開いてその先に見える光景に、彼女は俯きかげんで溜め息をついた。検査設備が整った巨大空間。その中央は海底の一部がむき出しになっいて、重厚な強化ガラスで囲まれている。その隔離された海底の一部は砂と岩石が混じり合い、白衣姿の職員が十数名立っていた。ただ……何か様子がおかしい。特に何か調査しているワケでもなく、その場にジッと立って、時折、ビクリと体をうねらしている。言葉を発することは無く、目も虚ろ。そして、彼等に囲まれるようにして砂地に突き刺さっているのは――『人型』。半透明の人の造形に、人間を構成する組織がぎっしりと詰まったモノ。

「経過報告を」
白衣の女はインカムをつけてボソッと呟く。
＜ある程度の脱水症状は見られますが、脈拍・血圧とも正常。ロボットを使った血液検査でも、ウイルス・寄生動物・異常タンパク質・毒物等はいずれも確認されませんでした。人体としては至って問題ありません＞
「目新しい成果は無しか……」
＜はい。ただし、脳波パターンに通常にはない徴候が見られます＞
「どういうこと？」
＜扁桃と海馬の間の神経ネットワークが同時に活性化し、異常な数値を示しています＞
「それは……『恐怖』を感じている？」
＜おそらく＞
「原因は？」
＜今のところ不明です。ただ、神の設計図（バイタルズ）から一定の『信号』が送られて、大脳辺縁系が受信しているようです＞
「……脳をハッキング？」
＜かもしれません＞
（くそっ……）
彼女は悔しそうに下唇を噛み、踵を返してエレベーターに。中には5、6歳くらいの男の子が一人……いつの間にか佇んでいた。
「蒼神博士の拉致失敗を想定し、ヘリの準備を」
＜宜しいのですか？　支配人（オーナー）が許可するとは思えませんが＞
「許可は必要ありません」
＜衛星による監視は軍部も行っていますが＞
「結構よ」
白衣の女と少年を乗せたエレベーターはゆっくりと上昇していった。

船上の激戦と静かなる監視（後書き）

※海馬＝大脳辺縁系の一部。特徴的な層構造を持ち、脳の記憶や空間学習能力に関わる器官。

拉致失敗と誘拐成功

右の突きをヒラリとかわし、左の手刀を手の平ではじき、真っ直ぐ打ち込まれてきた中段蹴りを両手で押さえこんで内腿をつかみ、持ち上げるようにしてブン投げる。

「せいッ！」

強制バク宙をさせられたプリエステスの背中めがけて、ねじり込むような蹴りをブチかます。

「ぐふッ！」

派手にブッ飛び、鉄柵に叩きつけられた。

「悔い改めないと神様泣いちゃうよ～～★」

シスターはウインクした。何故かした。

「……どうなっている？」

エンペラーがたじろぐ。ひょこっと現れた近所の悪ガキみたいな連中が、とんでもない障害となって立ち塞がっていた。

（ならば……）

彼は神父の方をキッと睨みつける。

「ええ～～……マジでェェェ～～（汗）」

相方に見捨てられてふて寝していたが、面倒臭そうにウネウネと這いだす。

ダッ――

エンペラーは顔面の前で両腕をクロスし、防御体勢で突進ッ！

「よいしょうッ！」

神父はそのメタボ体型に似つかわしくない俊敏な動きで起き上がる。

パシュッ！　パシュッ！　パシュッ！

地面を蹴って後ろに大きく退きつつ、両袖から滑り出した予備銃（バックアップ）

で迎撃する。９ミリ弾がエンペラーの皮膚を引き裂き、えぐる。が、突進のスピードは衰えることなく、そのままの勢いでヒット！
「ありゃま」
神父の体が宙に弾き出され、綺麗に弧を描いて地面に叩きつけられる。そのままゴロゴロと転がって、プールの角に脳天をゴリッとぶつけた……ゴリッと。
「こりゃーたまらん！　こりゃーたまらん！」
カナリ痛いらしい。
「潰すッ」
不吉な言葉を呟きながら、エンペラーが追い討ちをかけようと迫る。その殺気に反応して素早く立ち上がった神父は、飛び込み台の梯子に手をかけた。
ガチャ……
「ここまでだ」
「はうッ！？」
梯子に手をかけた途端、右手首に手錠がかけられた。親指を失って憤怒の形相のエンプレスが立っていた。

「せッ！」
シスターが突っかける。３メートル近くあった間合いを一呼吸で跳び越え、タワーの頬を直突きがかすめる。彼は辛うじてかわした体勢から左の回し蹴りを放つが、シスターの頭上を空振る。しかし、その足は着地せず、宙で方向転換して相手の右頬を打った。
「あうちッ！」
シスターに被弾したが、彼女はヒットと同時に蹴りの方向に合わせて体を半回転させ、中腰で水面蹴り。
ドッ――！
タワーの体が受け身をとれず、地面にうちつけられる。
「ごー・とぅー・へるッ♪」
シスターの振り上げた鉄拳がタワーの顔面を狙う。が、命中する

よりも一瞬早く、タワーが下半身を浮き上がらせ、寝そべった状態で脇腹に二段蹴りを叩き込んだ。
「オフっ」
カウンター気味に入って体が大きくよろめき、飛び起きたタワーが喉に掌底を打ち込んだ。
「うげッ……」
まともに食らえば呼吸困難もありうるダメージだ。
「個人が組織に勝てると思ったか？　小さい者が大きい者に勝てる道理はねぇよ！」
そう言ってタワーが指差す方向には……
「ここまでよ」
飛び込み台の先っぽに、後ろ手に手錠をかけられた神父が立たされている。その背後には、腸が煮えくり返ったエンプレスの姿が。
「咲チャ～ン！　こわ～い！　高いトコきら～い！」
泣いてる。
「茜ぇぇぇ～～、ちょっと聞いてくださるぅぅぅ！？」
相方の危機、無視った。
「それ以上暴れるなら、このガキを突き落とすッ！」
手錠付きですんで、もちろん溺れます。でも、彼女達に常識的な段取りはない。
「よし、質問だ！　あたしは弱いか！？」
「最っ強であります！」
「あたしは腰抜けか！？」
「百戦錬磨であります！」
「あたしは小さいか！？」
「Aェェェェカップであります！」
「よ～～～し良く言った！　逝ってよし！」
「あァァァりがとうございまァァァす！」
――――ピョ～～ン♪

「バカなッ！？」
跳んだ。エンプレスの手をすり抜け、手錠をかけられたまま。
「来週もまた観てくださいねェェェェェェェェ！」
エンプレスが慌てて手を伸ばしたが、その手は空をつかむ。次の瞬間、派手な飛沫が上がって水面が大きく揺らぐ。ただ、その揺らぎとは関係なく、水面からニュッと突き出たのは……銃口。
「――――――ッ！？」
パシュッ！
下をのぞきこんだエンプレスの左肩を銃弾が穿ち、飛び込み台から転げ落ちる。
（後ろ手で撃ちやがった――――！？）
ありえない芸当を目の当たりにして、エンペラーが息を呑む。
「だからまた来週って言ったのにねぇ……ふぅがふぅぐ！！」
相方の仕事をしっかり確認したシスターが、何だかスッキリした面で構え直す。救助してやる気は毛ほども無いようだ。
「ナメんなよガキがッ！」
タワーはおもむろに上着を脱いで、敵めがけて投げつけた。
タンッ――！
上着が宙を舞うのと同時に、タワーも跳んで蹴りの体勢。不意に視界を遮る物体が投げつけられれば、大きく回避するか、その場で叩き落とすか。が、シスターは勢い良く被さってきた上着を鷲掴みにし、グルンと体を一回転させ、相手めがけて投げ返した。
「うおッ！？」
想定外の応酬にタワーの体勢が大きく崩れ、何もできぬまま相手の目の前に着地してしまう。
「ていッ！」
ドカッ――――！
顔面に足裏が直撃――ダウン。
「こちらα！　現在襲撃を受けている！」

この状況に危機感を募らせたエンペラーが、インカムでヘリのパイロットに呼びかけた。
＜何事だ？＞
「乗客と思われる女が二名！　一人は拳銃を所持！　もう一人は……」
と言って、視線を移したその先では……
プリエステスが滑り込み気味にローキック。シスターはこれを垂直ジャンプで回避し、空中で下半身をねじって回し蹴りを放つ。これを予測していたプリエステスは、腰を落として避け、着地したシスターの胸ぐらをつかんで自分に引き寄せて密着し、目一杯の力をこめてヘッドロック！　プリエステスの腕がグイグイと喉に食い込み、動きを縛る。
「このまま海に放り出してあげるわ」
ヘッドロックをかけたまま回転。ジャイアント・スイングの要領で遠心力が加わり、ブンブンと空を切る音が大きくなる。
「出るッ！　出るッ！　中身が出ちゃう～～～～！」
「さあ、逝きなさい」
バッ――！
人間一人を吹っ飛ばすのに充分な遠心力が充填され、タイミングをはかりヘッドロックを解いた。が……
「懺悔はここまで」
「――――え？」

――――ズダンッ！！

ものすごく痛々しい音がして、プリエステスの後頭部と頚椎が地面に叩きつけられた。
（何てヤツだ……！）
イヤな汗が体中から吹き出るのを感じた。エンペラーは見た……シスターの体が宙に投げ出される瞬間、プリエステスのネクタイが

つかまれ、遠心力と咲の体重から生じた引力により転倒。もちろん、受け身など取りようもない。
「さて、残るは一人」
エンペラーにシスターの不吉な視線が向けられる。
「ヘリを戻せ……」
＜蒼神博士はどうした？＞
「いいから戻せッ！」
パイロットに怒鳴りつける。
「茜ぇ～～、大丈夫か～～い？」

プ～～カ、プ～～カ……

ぽってりしたお腹を夜空に突き出し、ラッコみたいに浮いている。
「体脂肪率に救われました」
まさに。
「はいはい、今すぐ引き上げますからね」
ズリズリズリ……
そう言って持ってきたのはさっき使った地引網。
「やめてッ！　マジやめてッ！　咲チャン絶対痛くするから！！」
バシャ……
もう遅い。神父のプニプニした肉体に網が絡まっていく。暴れる度にもっと絡まっていく。巻かれていく。引き上げられる。
ドキドキドキッ……ドキドキドキッ……
網の中から目にしたシスターの御顔は、とっても恋する5秒前。
「ふぁいとおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッッッ！！」
両腕にビキビキと血管が浮き出し、人間一人を包み込んだ網が――
「いやあああああああああああああああああああああああッ

ッッ！！」

ザパアァァァァァァァァァァァ〜〜〜〜！！

跳ね上がる水飛沫。浮き上がる女体。空を切る音。即ち――人体砲丸投げ。

「……何だ？」

この怪現象に気付いたエンペラーが硬直する。

ブオッッッ！！

放たれた。

「ちッ……」

あまりのアクションに意表をつかれはしたが、対象物の大きさから回避は難しくなく、人体砲丸は彼の肩をかすめただけ。ただし……

パシュッ！　パシュッ！　パシュッ！

網の中からという完全なる死角からの発砲。

「あぐッ！？」

肩先と二の腕から血が吹き出る。神父の方は仕事を終えて地面を派手に転がり、ヘリポートの鉄柵に後頭部をゴリッとぶつけて停止……ゴリッと。

「おォうェェェェェェ……（泣）」

おまけに吐いた。

「救済終了（ゴスペル）★」

圧勝。自らに拍手を送りながら、シスターは胸元で十字を切った。

その直後……

ヒュンヒュンヒュンヒュンッ――――！

「なんとォ！？」

背後から不意に巻き上がる風。彼女の体を穿つかのように照射さ

れる、強烈なサーチライト。無音ヘリがその威容を現した。
「神父様ッ！」
「えいめ～～ん！」

パシュッ！　パシュッ！　パシュッ！

水浸しのプールサイドに体を滑らせながら、ヘリめがけて連射。しかし、銃弾はヘリの機能に障害をもたらすほどのダメージは与えられず、軽く火花を散らしただけ。
「装甲がブ厚くて９パラじゃ無理っぽ～～い！」
「おにょれ！」
ヘリが緊急着陸する。
「タワー！　プリエステス！　早く来いッ！」
「しかし……」
「我々が確保されたら、ＰＦＲＳの法的接収を許すことになりかねん！」
「エンプレスはどうするの？」
「時間が無い……急げッ！」
一瞬、エンペラーがプールの方に目をやった。仲間の姿は確認できない。彼は悔しさに歯を噛み鳴らしつつ、ヘリに逃げ込む。
ヒュンヒュンヒュン――
「咲チャン、どーする？」
「別にいいじゃん。ギャラリーもいないし」
ヘリは敗残者を乗せ、闇の帳へ去って行った。

――――――――　５時間後　――――――――

「ん……うぅ……」
水平線から朝の領域を知らせる日がもれてきた。豪華客船の重厚な船体も、その恵みを欲してゆっくりと脈拍を上げていく。

「あふぅ……」
差し込む朝日が、ソファに横たわる青年を呼び起こそうとしている。蒼神博士はムクッと上半身をもたげ、手の甲で両目をゴシゴシとこする。そして、朝日の差し込んできた方向へ反射的に視線を向けた。
（2日目か……よかった、何もなくて）
彼は寝惚け眼のまま、辺りを見回した。

茜――自分が使うハズだった瀟洒なベッドで爆睡中。
咲――リビングの隅っこで丸まって静かに就寝中。

「……どうしたものか」
彼は幸せに満ち足りた茜から躊躇なく毛布をひっぺがし、咲の背中に優しくかけてあげた。博士は何だか照れ臭くて苦笑した。彼は洗面所のドアを開けて、バスタオルを用意する。汗ばんだTシャツと下着を脱いで、洗濯機に放り込む。そして、シャワー室のドアをガチャ。
「……」
「……」
バタンッ
ドアを閉める。博士が全裸のまま呆然として突っ立っている。
「え～～と……え～～と……（汗）」
もう一度、ガチャ。
「……」
「……」
バタンッ
再度閉める。
「……んん？　ちょっと待てよ……（汗）」
で、更にもう一度ガチャ。
「……」

「……」
寝惚けちゃいない。見間違えちゃいない。猿轡をかまされて、簀巻にされた女性がバスタブの中に放り込まれている。
「……」
「……」
見つめ合うしかない二人。女性の方の視線が、ちょっぴり下半身に向かったりする。
バタンッ――！
「咲さーん！！　茜さーん！！」
彼はバスルームから脱兎のごとく駆け出して、二人の名を叫ぶ。
「は～～～～～～～い……」
ものすごく間延びした声をハモらせながら、バカ面コンビが登場。
「おはようございますッ！　そして、説明してくださいッ！」
ガチャ
「……」
「……」
「……」
「……」
今度は四人分の沈黙。
バタンッ
閉める。
「た、大変よ、茜ッ！　朝っぱらからこんなコアなプレイを！？」
「わたし達も博士のバイオレンス・スティックで手込めに！？」
どうしようもなくわざとらしいリアクション。
「で、コレは一体、どういう事なんですかッ！？」
慌てふためきつつトランクスを穿き直す博士の背中は、なんだか小さい。
「女の人ですな」
「そうですねェ」
「……」

「こりゃ誘拐ですな」
「そうですねェ」
「……」

――――――

――――――

誘拐？

秘密協定と裸エプロン（♂）

「ドコのダレですか！？　これは立派な犯罪ですよ！！」
「ひどいッ！　あたし達がやったと！？」
「見知らぬ女性が部屋に侵入して、自分を縛ってバスタブに入った……とでも？」
博士は被害女性をビシッと指差して問う。とにかく、まず助けてやれよ。
「んーッ！　んーッ！」
声を出せない被害女性Ａさんが、バスタブの中でバタバタしはじめた。
「むッ、こりゃイカン！　寒くて震えとる！」
夏場です。
「じゃあ、バスタブを熱湯で満たさなきゃ！」
死んじゃいます。
「もういいです」
博士は二人をバスルームからつまみ出す。
「大丈夫ですか？」
バスタブの中の女性がやっと救助される。猿轡を取ってやると開口一番に……
「どういうつもりですか、蒼神博士？」
「……はい？」
いきなり自分の名を呼ばれ、パンツ一枚男は固まった。
「私一人を人質にとったくらいで、ＰＦＲＳが取引に応じるとでも思いましたか？」
「――――ッ！？」
迂闊だった。『ＰＦＲＳ（パフリス）』の名が出た以上、この女は客船のクルーでも客でもない。
「君は……ダレだ？」

「『スノー・ドロップ』のエージェント・エンプレスです」
女はキッと博士を睨みつけて名乗った。
（バカな……この船を占拠したのか！？）
いや、そんなハズはない。追及の矢面に立たされているＰＦＲＳが、大勢の民間人を前にして秘密工作などありえない。
「『フリージア』の襲撃が失敗した後も、本部はアナタの動向を衛星で監視していました」
「それは……支配人（オーナー）の指示ですか？」
「ええ、そうです。本部が最も危惧したのは、博士が実情を正しく理解せず、間違った情報をマスコミに垂れ流す事」
「ボクは……上級職員として神の設計図（バイタルズ）のプロジェクトに携わっていました。何が正しくて、何が間違っているかは把握しています」
「博士が何を把握しているかは、私達にとって問題ではありません。支配人（オーナー）がなさる事に間違いなどないのですから」
「なら、どうして彼はフリージアをよこしたんですかッ？　明らかに口封じじゃないですかッ」
「……本来の目的は『殺害』ではありませんでした」
「え……？」
「監視衛星の映像は軍部に中継されており、軍部からの命令は『拉致』でした」
「なら、フリージアの件は……支配人（オーナー）の独断？」
「ええ、そうです」
エンプレスの表情が申し訳なさそうに曇った。何かおかしい……最大の出資者である軍部の指示を無視しても、ＰＦＲＳには何の得もない。
「そういえば、アナタは一人でこの船に？」
「いいえ、私は……」
バンッ――――！

会話を中断させようと、バスルームのドアが勢い良く開く。
「博士ェエエエエエ！　朝シャンしたあああああ〜〜い！」
御風呂セットを脇に抱えた咲と茜が元気に乱入し、有無を言わさぬ強引な空気を噴出させている。
「え、あの……まずはこの女性を……」
「脱ぐよ！　叫ぶよ！　訴えて勝つよ！」
「はい、出ます」
パンツ一枚男は足早に退室。
「──────さて」
咲の口から冷ややかな声が。そして、蛇口が目一杯にひねられた。
「うぶッ！？」
大量の冷水がエンプレスの顔面を打つ。
「ど〜〜よォ？」
とても楽しそうな咲の笑顔。その脇では茜が小躍りしながら脱衣中。
「拷問のつもり？」
「……拷問？」
「こんなことで私から情報を引き出せると思うなッ」
「……情報？」
「とぼけるなッ！」
冷水を浴びながら抗議の声を上げる。
「咲チャ〜ン、このオ姉サンって、わたし達の社会的立場を勘違いしてるみたい」
「むッ、そりゃイカン。では自己紹介だ。あたし等は調査会社の社員。つまり、民間企業のサラリーマンだ。２４時間働けますかって？　無理だバカヤロー！」
「……調査会社？　蒼神博士に雇われたシークレット・サービスか？」
「違うッ！　あたし等は傭兵でもスパイでも何ちゃらエンジェルでもねぇ！！　納税に苦しむ国民様だッ！！」

ドボドボドボ……（水位上昇中）

「身分証は？」
「見やがれッ！」
そう言って社員証をズイッと突き出した。
「……『イレギュラー』？」
泥棒を見るような目で、社員証と咲の顔を交互に観察する。
「これにより、民間企業の栄えある社員であることは証明された！　あたしこそが汐華咲、１８歳！　座右の銘は“アンチ・萌え”！」
「で、わたしが相方の柏木茜、１９歳！　健康診断でひっかかる度に、枕を涙で濡らすメタボリック！　いやッほォォォォォォォォォォ♪」
朝からブチギレてる少女はブラ（Ｆカップ）を振り回す。
「アナタ達……本当に民間人？」
「おうよ、ミンミンでカンカンよ」

ドボドボドボ……（水位上昇中）

「で、数時間前に殴り合いしといて今更なんだけど、自己紹介よろしく」
「フザけるなッ！　人を誘拐しておきながらッ！」
「おいおいおい、人様のクライアントを拉致ろうとしたプロの不審者が、この状況で上から目線かね？　どー思うよ？」

シャアアアアアアァァァァァァァァ――――

すぐ傍でシャワーを浴びる茜。ウエストのお肉がプルプルと愉快に震えてる。
「今日からああァァァァ～～♪　炭水化物ダイエットォォォォ～～

♪」
「やかましい」
――パコンッ
近くにあった桶を投げる。当たる。アホが倒れる。

ドボドボドボ……（水位は胸元まで上昇）

「ＰＦＲＳは軍部からの出資を受ける国営企業……つまり、私は政府の執行権を委ねられた役人よ。蒼神博士を強制送還するよう命令を受けた。これは法に則った正当な行為だッ！」
「はいはい、そーかい。ただねえ、御役人様には理解できない苦労が巷には溢れとりましてね。きっちり仕事こなさねえと依頼料がパァ」
「現金ならＰＦＲＳが賠償してくれる」
「……って言ってるけど、どうするよ？」

シャアアアアアアァァァァァァァ――――

「悪の秘密組織みたいなトコから現金収入得たくな～～い！　モーレツに反対ッ！　児童ポルノ賛成ッ！」
社会的にマズイ発言を垂れ流しながら、全裸少女が拳を振り上げる。
「……ってなワケ。うちは信用と信頼で経営を維持しとるんで」
「蒼神博士はＰＦＲＳの機密情報を盗み出し、非人道的な実験をしているなどとマスコミに公表した！　そんな彼に加担するのか！？」
「ん～～……親指は痛むかね？」
咲は話を逸らし、ビニール袋を取り出した。中には……人間の手の指。
「……ソレがどうした？」
「いやぁスゴイよねぇ……根元からフッ飛ばされたのに、大した処

置もせず出血が止まってるし。他の連中も胸に撃ち込まれたのに致命傷にもならん」
「だから？」
「“非人道的な実験”とやらは、ホントに無かったのかねえ」
「……」

ドボドボドボ……（水位は首まで上昇中）

バンッ――――！
オープン・ザ・ドア。
「博士ェェェェェェェェ！」
ドアの前に姿は無し。リビングにも無し。寝室も同様。キッチンに……居た。
「冷蔵庫の野菜室をパンツ一枚でゴソゴソしているそこの人ッ！」
「な、何でしょう……？」
「『強化人間（ブースト・ヒューマン）』とは何ぞや？」
「え？　あ……は、はい。『強化人間（ブースト・ヒューマン）』とは、人工的に作成した酵素で遺伝子疾患の遺伝子配列を修復してあり、病気にかからず外部からの物理的ダメージも、驚異的なスピードで回復する機能を有した者です」
「なるほど、よく分からん」
不敵に微笑みながら言うセリフではない。
「それはそうと……あの女性はＰＦＲＳ本部に常駐するＳＰですよ。どうしてバスタブの中に？」
「おおっと！　イカンイカンっ！　水を出しっ放しだ！」
バタンッ――――！
そう言ってまたもやバスルームへ。
「ヘイっ、ユー！！」
シャンプーハットを装着した茜が妙なポーズで指差してくる。
「どけいッ」

なんとなく邪魔だったんで、シャンプーハットを奪って捨てる。
「目がッ！　目がああああああああッッッ！」
期待通りシャンプーが目に入って、悶絶。
「ちょっとさあ……取引といかない？」
威圧的な瞳でバスタブの中の被害者を見下ろす。

ドボドボドボ……（水位は口元まで上昇）

「……取引だと？」
――――ザバンッ！
エンプレスの髪が鷲掴みにされ、顔面が冷水めがけて荒々しく突っ込まれた。いち……に……さん……し……ご。
「……ぶはッ！　げふッ、げふッ！」
不意に呼吸をやめさせられ、彼女の顔はクシャクシャだ。
「まずは話を聞けや、役人様」
「や……やかましい！　こんなマネをして――」
――――ザバンッ！
いち……に……さん……し……ご……ろく
「……ぐへッ！　げふッ、げふッ！」
容赦無し。
「いいから聞け」
「ぅ……」
髪を掴む手に尋常ならざる力がこもっている。咲の顔面が超至近距離まで近づき、エンプレスの視界を占める。
「あたし等はさあ、あくまで“調査会社の社員”でいたいワケよ。だから、アンタから博士に色々しゃべられると困るんだよねえ。昨晩のコトとかさあ」
「……そ、それで……？」
ＳＰとしての忍耐が萎縮する。
「ＰＦＲＳ本部まで無事に博士を送り届けるのが仕事。もちろん、

アンタには同行してもらうから、その間は口裏を合わせて欲しいワケよ」
「やはりな……博士をダシに、ＰＦＲＳ本部に侵入するのが目的か。一体、何者だ？　何の用があるの？」
「用？　え～～～と……茜ぇ、何か用事ある？」
「別にぃ、特になぁぁぁし！」
とりあえず、今はムダ毛の処理中みたいですのでモザイクをください。
「もちろん、同行はする……博士を連行するのが当初の任務だからな。だが、貴様等のような危険人物と取引などしない！」
「へえ、ならさあ……」
不意に咲がエンプレスの耳元に口を近づけ、ソッと囁いた。その囁きでエンプレスの興奮が急に治まっていく。
「……いいだろう」
「よろしい、よろしい」
取引が成立した。

――――――――　１０分後　――――――――

バタンッ――
「博士ッ、風呂空いた～～……って、うおッ！」
「はい？」
料理をする音が聞こえる。キッチンには蒼神博士が立っている。もちろん、トランクス一枚。その上からエプロン着用してるもんだから、正面から見るぶんには裸エプロン。
「うほッ★」
咲がいけない声を出す。
バタンッ――！
バスルームへ再度突入。
「茜、大変ッ！　２３歳の美青年がキッチンで裸エプロンに！」
「まあ、なんて卑猥なッ！　早速録画ねッ！」

バタバタバタッ――
二匹のケダモノは縛られたままのエンプレスを残し、バスルームを飛び出していく。
（くそッ……）
たかだか十数分で終わる任務のハズだった。
（……どうする？）
任務の性質上、ＰＦＲＳからの救援は期待できない。となれば、本部への潜入作戦に同行して、自力で帰還するしかない。先程の取引内容が頭の中をよぎる。彼女はスーツの所々からジョロジョロと水を垂らし、立ち上がった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2973z/

考えろよ。

2011年12月24日06時46分発行